

T・ヴェブレンと社会学

——テクノクラシーの思想にかんする学説史的問題——

倉 橋 重 史

アメリカの社会学の歴史のなかでソースタイン・ヴェブレン (1857—1929) の占める地位は明確ではない。経済学において彼が異端視されていたのと同様に、あるいはそれ以上に社会学において彼は異端として取扱われていたといえよう。社会学において彼は制度学派の経済学者であると評価され、経済学にあっては彼の理論は社会学、心理学に接近したものと考えられる傾向がなかったとはいえない。

この小論の目的はこのような彼の位置づけと評価を再検討するなかで彼の思想、とくにテクノクラシーの思想を社会学との連関性という点から学説史に位置づけ、彼の社会学的研究を明らかにすることにある。

彼のテクノクラシーの思想に注目した理由の1つは彼の技術と技術者にかんする理論がその思想の中心理論であり、そこで彼が技術を中心とする一種の技術史観を展開していること、第2の理由は彼のテクノクラシーの思想のなかにわたくしの意図する技術の社会学の重要な問題、たとえば社会的習慣、伝統、制度と技術の発達との関係、技術者と技術者集団および技術者の組織、階層の社会的機能とその位置づけなどの問題が含まれていること、第3の理由は技術にかんする社会学的研究の系譜をたどるときオグバーン以前にヴェブレンが論及した諸点があること、第4の理由は彼の研究においてどのような意義をもつかという点を再検討したいことである。

この小論でとりあつかいたいのはこのような彼の技術の社会学的分析を、その前提となる社会学理論とのつながりのなかでとらえることである。つまり彼のテクノクラシーの思想が社会学理論とどのようにつながり、社会学理論としていかに体

系づけられているかという点を明らかにすることにある。

もちろん彼の思想はテクノクラシーの思想に限られるものでなく、彼が論及した点は多岐にわたっている。たとえば「有閑階級論」は階級にかんする社会学研究であり、精神的財である教養が社会的勢力の誇示に役立つ象徴性をもつことを論じたユニークな社会学理論である。また「アメリカの高等学術」においては企業の原理による大学制度の侵蝕を大学の世俗化と商業化のなかでのべ、今日の大学問題のもつ根本的な問題点を指摘している¹⁾。

リースマンが指摘するように彼は経済学において歴史学派の流れをくみ、哲学においてはカントとヘーゲルの哲学の影響をうけ、心理学の分野ではダーヴィンやデューイに接近し、人類学ではダーヴィンの方法論をとり入れた²⁾。このように彼は多くの学問と隣接諸科学の影響をうけ、それを批判しつつ独自の理論を構築するために摂取していった。それゆえ、彼の理論は多岐にわたり、彼が論及した問題とその領域は広い範囲におよんでいる。また彼の理論はその独自のいゝまわし (Veblenian Phraseology) のゆえに難解であり、その独創性のゆえに他の学問、諸科学から異端視され、これに加えてドーフマンものべるように彼は体系的理論の構築者でなく、理論のすべてが論理的で一貫性をもっているとはいえない。

このような彼の多岐にわたる思想と広汎な理論のすべてを論じることにはわたくしの能力をはるかにこえるものであり、またこの小論でよくするものではない。したがってここではテクノクラシーの問題を社会学との連関においてとりあつかうにあたって次の諸点に焦点をおきたい。

1. ヴェブレンの思想と社会学との連関性、社

会学の立場からするヴェブレンへの接近の問題。
2. テクノクラシーの思想とヴェブレンの関係、
彼がテクノクラシーの思想において占める位置の
問題。3. サン・シモンとコントとヴェブレンと
の連関性、とくにコントとヴェブレンの主張と視
角の類似点と相違点。4. ヴェブレンと社会学と
の連関を進化論に求め、それをスペンサーとヴェ
ブレン、および両者の仲介者の役割を果すサムナ
ーの社会学理論に注目し、そこからテクノクラシー
の思想の一つの支柱である制度論への展開の原
点をたしかめること。5. テクノクラシーの思想
のもう一つの支柱である本能論について当時の社
会心理学との結びつきをマクドガルに求め、ヴェ
ブレンの習慣論と本能論の特色をみること。6.
以上の5点をもとにして彼の社会学と技術の社会学
的研究の特色を指摘すること、以上の6点である。

から批判した書物を出している。

それにもかゝらず社会学の立場からするヴェ
ブレン研究と彼にみられる社会学的な理論につい
ての検討は他の研究と比較してかなり少ないとい
わねばならない。

このことは何に帰因するのであろうか、なぜ彼
の理論は社会学理論として学説史上明確に位置づ
けられなかったのであろうか。その理由として次
の3点を考えてみる事ができる。

第1に彼の理論は多岐にわたっていたけれども、
その中心は経済学にあって社会学ではなかったこ
と、あるいはそのようにみられていたこと、第2
に彼の理論は経済学の分野にみられるほど明確に
社会学理論として展開されず、その体系化も明瞭
でないこと。たとえばテクノクラシーの思想にお
ける理論の一つとして制度論をとりあげてみても、
彼の経済学においてはそれは資本主義体制論とし
て価格制度、賃金制度、のちには不在所有者制度
の分析として展開され、さらに産業と企業の矛盾
は物財的な産業資本と金銭的な企業資本の対立と
してとりあつかわれ、貸付信用の理論と株式会社
資本の実体究明となつてあらわれているが、社会
学における分野ではそのような理論化が明確にお
こなわれていないこと。第3に彼の経済学の理論
が異端視されていたのと同様に社会学においても
彼の理論は異端として取扱われ、彼の理論が当時
の社会学およびその後の社会等に直接大きい影響
を及ぼさなかったことである。

しかしこのことは彼の理論に社会学的研究が含
まれていなかったとか、彼の社会学理論が不毛で
あるということを意味しない。ヴェブレンの思想
と理論を社会学の立場からみようとすると、以
上の3点をふまえたうえで積極的に社会学との接
点を見つけだすことが必要であらう。それは次の
諸点に求められよう。

1つは彼の理論が、当時の経済学においてもま
たその後の経済学においても異端視されていたこ
とは、経済学以外の学問と諸科学、とくにここでは
社会学と、それに隣接した領域に多くの問題を提
起したことを物語るものである。2つはこのこと
から彼の理論が社会現象を分析するうえで経済的
要因のみならず多くの非経済的要因に注目したこ
とを示す。今日の社会学における産業化理論と経

(1) 註(1) 蔵内数太「文化社会学」328頁、「社会学」225—
226頁

小原敬士「T・ヴェブレンとアメリカの大学」
「思想」484号

(2) D. Riesman, Thorstein Veblen; A Critical
Interpretation ix

二

ヴェブレンの思想は多岐にわたり、彼が論じた
問題も多くの領域におよんでいた。このことは彼
に影響した思想が多いことと関係している。

彼の思想についてはドーフマンの「ヴェブレン
とアメリカ」をはじめとしてすでに多くの解説や
研究がおこなわれており、彼の理論については種
々の角度から批判もなされている。ドーカート
のいうように彼の理論については「意見の不一致が
例外でなく、むしろ原則である」とさえいわれる
ほどである¹⁾。

このように彼の思想全体について、あるいは彼
の個々の理論にかんしても多くの研究と批判がお
こなわれてきたが、社会学の立場からする研究は
これにくらべると少ないといわねばならない。も
ちろん彼の「有閑階級論」については、これが出
版された当時ウードにより批評がかけられ、その
後もこの理論にかんする紹介と研究がおこなわれ
てきており、またリースマンはヴェブレンを正面

济学における経済成長の理論において非経済的要因としての社会構造、制度、価値体系などを取りあげ、それらを経済的要因との連関において分析する試みがなされているが、ヴェブレンの試みはいわばこの先駆的なものとみることができる。これに加えて第3の問題として、とくにここで重要なことは彼のテクノクラシーの思想にみられる社会学的研究である。彼のテクノクラシーの思想は技術者を中心としたエリート論であり階級論であると考えることができるが、その基底には産業と企業との対立を「物質的環境」と「制度」との矛盾に由来すると説明する二元論がある。そしてこの理論は近代資本主義体制における産業構造、社会構造の分化から生じたものである。この社会構造を彼は制度といふあらわした。制度は社会的にはメンバーの社会関係の規則・規範の体系として非人格的な側面において理解され、制度的規範の諸関係が社会構造をつくるものとされる。また他方において制度を行動様式の統合の形としてみればそれはメンバーの役割における相互性の総体とみなされる。ヴェブレンにおいては制度間の矛盾が問題であって、この対立と矛盾をその出発点において行動から説明した。出発点になる行動は本能と習慣の側面から把握される。彼はこの本能を生物学的概念としてでなく社会学的、心理学的概念として用いている。彼は社会心理学にもとづく本能論を基底として、制度と行動との相互作用的な進化、発展のプロセスを分析した。その一端が制作者本能、思考・習慣、産業制度と技術を中心とするテクノクラシーの思想となつてあらわれたといふことができる。第4点として社会的文化が物質的条件により形成され、変化は制度に結晶する社会的習慣の形でおこるものであり、しかもこの制度の成長と変化は淘汰と適者生存にしたがつて生じるとみるヴェブレンの進化論的な社会変動論である。それは旧制度としての私有財産制と新制度としての産業制度、あるいは企業制度と産業制度の「遅滞」現象にかんする理論を含み、また伝統的文化の固定化、停滞化にかんする文化変動論である。

ところでドーフマンがヴェブレンの思想の現代的意義について彼の著作が依然として多くの論争の源泉になることは、その生命力を証明するもの

であるとのべ、ガルブレイスも「ヴェブレンの影響がどれほど強かったかについては今後も論争がたえないであろう。彼は疑いもなくアメリカ固有の経済思想家であった」の称讃したが³⁾、このことが彼の死後40年を経た現代、社会学においていえるとするればどの点においてであり、いかなる意味においてであるかを、彼の理論に即して吟味しなければならない。

註(1) S. M. Daugert, The Philosophy of Thorstein Veblen p. 1

(2) この第4点の問題については A.L. Harris, Veblen and the Social Phenomenon of Capitalism (American Economic Review Vol. XLI No. 2) の説明を参考にした。なお、ワトキンスは別の角度からヴェブレンの文化変動論の特徴をとらえている。それは制度的借用という積極的な側面と「汚染」(Contamination) という消極的な側面についてである。M. W. Watkins, Veblen's View of Cultural Evolution (Ed. by D. F. Dowd, Thorstein Veblen; A Critical Reappraisal) p. 257

(3) J. Dorfman, The Source and Impact of Veblen's Thought (Ed. by D. F. Dowd, T. Veblen; A Critical Reappraisal) p. 1

三

テクノクラシーの思想を広義に解してプラントクラシーや重農主義にさかのぼり、科学主義にもとづく社会組織の再編成と社会の変革を企てる主張とみる説もある¹⁾。それはテクノクラシーを思想的には18世紀の重農主義者の思想と19世紀の空想的社会主義の主張にさかのぼってとらえようとするものである。しかし一般的にはテクノクラシーはより限定的に1930年代のアメリカでおこった科学者、技術者による社会組織の計画的改造と、産業的資源の支配と統制を主張する思想であるといわれている。

アメリカはヴェブレンの死後間もなく1929年11月にはじまったウォール街の株価の暴落によって経済恐慌におちいった。この大恐慌が発生した一般的な原因として対外的には第1次大戦後に膨脹したアメリカの生産力と世界の4割を占める金の集中により、世界経済のそれらとのアンバランスを生み出したこと、対内的にはアメリカの資本主義制度の欠陥として価格制度、賃銀制度の矛盾と機械化にともなう大量の失業者、流通機構の不備

などをあげることができる。当時の恐慌は物質の欠乏でなくその豊富さのために生じ、財貨の不足でなくむしろその巨額な所有のゆえに発生し、労働力の不足でなくその過剰のために起ったという矛盾のゆえに深刻であった。

この矛盾と行づまりを打開するために科学主義と技術原理にもとづく経済生活の再建案としてテクノクラシーの思想が注目された。それは当時おこなわれたロシアの5カ年計画の進展に刺戟され、またニュー・ディール政策の出発に呼応して独占資本主義の弊害をとりのぞき経済生活を合理的に再建する案として脚光をあびた。

テクノクラシーという言葉を最初に発案したのはウィリアム・ヘンリー・スミスであり、それは1919年であった。彼は資本主義の欠陥を指摘しそれを克服するために生産者と技術者による社会の改造を考えた。生産者と技術者は人類に役立つ物質の生産に従事し、生産における動力と労働と技能を発明し改良し研究する人々である。

このスミスの考え方は21年に公刊されたヴェブレンの「技術者と価格体制」のなかで理論的に展開された。それは資本主義のうむ矛盾を企業と産業とを二分することによってとらえ、その対立の過程を分析したものである。

企業者の目的はもっぱら私的利潤を追求することにあつて、大衆の利害は無視される。彼等の基準は金銭的営利であり、そこでは生産的効率も産業の進路を決定することもすべて金銭的利得の観点からおこなわれる。この傾向は産業革命以降ますます顕著になる。彼は企業者を「事物の金融的目的を配慮」する人と規定し、企業の指導者を特権階級「不在所有者」とよび、「企業の将師」さらに「金融の将師」とよぶ²¹⁾。一方産業の目的は効率を高めることにある。その指導者は「産業の将師」である。財貨の生産を通じて人間に奉仕しようとする産業は、貨幣経済の時代が信用経済の時代にうつりかわるにしたがつて企業によって支配されるに至る。この状態を彼は「現在の技術と営利主義の支配下にあつては産業が企業者により、営利目的のために経営されるのであつて、技術的専門家によって、あるいは社会の物的利益のために経営されるのではない」とのべている²²⁾。機械制産業の成長期の初期において、産業上の専門家と企

業経営者との明白な分化はみられなかった。しかし産業体制が急速に発展し機械制産業組織が進展してくると、初期の「産業の将師」はその性格をかえ「企業の将師」に移っていく。それは企業経営者と事務職員、技術者と労働者へと二つに分かれていく。そして19世紀の中頃以降「企業の将師」は指導的な立場にたつに至った²³⁾。生産者と企業者の機能が分化していなかった状態から、企業者の機能がわかれて企業の資金面へ集中するようになる。企業の利潤を高める貸付信用を利用するという点にその関心が移っていく。つまり「企業の将師」はもっぱら営利活動にむかい彼等の関心は金銭的利潤の追求に集中する。そして産業上の設備や効率にたいする関心はすべてこれを技術者にまかせるようになる。ここに至って「金融の将師」が資本を操作し産業を支配するようになる²⁴⁾。ヴェブレンはこのように技術者が企業の金銭的利潤と営利により「汚染」されている状態から技術的効率を解放するために技術者のソビエト（同盟）を提唱したのである。彼は機械過程の訓練をうける階級に労働者のみならず科学者・技術者を含め、これを産業階級とみるが、そのなかで一般労働者よりも技術者を重視した。それはきわめて少数の人々である。ヴェブレンにいわせれば全体の1パーセントといったわずかな部分であり、それが組織して総罷業をすればたちまち旧秩序は崩壊し、金融と不在所有者制度を停止させることができる考えたのである²⁵⁾。この技術者革命論の考え方はユートピア的であり、技術者エリートだけを中心とした議論であり、科学者と技術者の集団・組織にかんする分析を欠き、大衆の組織化を考慮に入れず、彼のいう産業上の兵卒の集団、荒れた手をもつ軍隊である労働者階級とのつながりを看過しているといえよう。

では、彼は技術者のソビエトによって旧秩序を破壊したあとにくる新しい産業秩序をどのように考えていたのであろうか。彼はそれが旧秩序の欠陥を修正するように工夫されねばならないと考え、とくに産業管理に重点をおく。つまり資源の適正なる配分、利用可能な設備と労働力の完全で適当に調和した雇用、仕事の無駄をはぶくこと、消費者にたいする財貨と、労務の公正で十分な供給を提案した。そのなかでもっとも緊急の仕事を

「動力、設備および原料の形をとっている利用しうる資源を、比較的主要な諸産業のあいだに適正に配分すること」であるとし、この作業を進行する指導者は資源技術者、運輸、完成財、労務の分配取引における有能な代弁者からなる三者構成の委員会であり、これを助言するために多くの生産経済学者をあげた⁶⁾。

この考え方はスコットによりさらに具体的に運動となって継続され、技術者の組織化が推進された。ヴェブレンは技術者の協力をよびかけるとともに「この国の産業力のかかなり完全な地籍測定」を提唱し「それはある程度くわしくこの国の産業の全体にわたる実行可能な組織表—エネルギー資源、原料および労働力の一覧表—をつくりあげねばならない」ことを指摘している⁷⁾。この指摘はスコットの「エネルギー測定之法則」とそれにもとづく「北米エネルギー調査」となって実現している。スコットは価格でもって計算する制度は、発達した機械産業の時代にふさわしくないと考え、エネルギーを価格測定の基準とすることを提案した。そして北米における社会的機構の物理的機能を測定するため小麦から鉄鋼にいたる3千種の商品を選び、それらの生産と分配の過程にふくまれるファクターを示す図表をつくった。

このスコットの理論と主張はシュタインメツ、アッカーマン、ジョーンズ、トールマン、チーズらの人々にうけつがれ「技術同盟」(Technical Alliance) という私的研究会となってあらわれた。その目的は技術者の相互協力と外部からの委託調査を行なうことにあったが、IWWなどの若干の調査を行っただけで財源難から解散した⁸⁾。

このほかにテクノクラシーの思想を中心としてつくられた組織には1932年のAATS(All America Technological Society)や33年のTechnocracy Inc., CCT(Continental Committee on Technocracy)などがあるが、これらは30年代のアメリカのテクノクラシーの思想の普及とその実践的活動を示している⁹⁾。

註(1) W. H. G. Armytage, The Rise of Technocrats, p. 41 ff.

(2) ヴェブレン「技術者と価格体制」小原敬士訳34頁、44—45頁。

(3) T. Veblen, The Instinct of Workmanship and

the State of the Industrial Arts p. 351

(4) T. Veblen, Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Time: the Case of America p. 106

ヴェブレン「前掲書」訳62—63頁。

(5) ヴェブレン「前掲書」訳81頁。

ゴールドは「テクニカル・エリート」(The Technical Elite)のなかでヴェブレンの「技術者と価格体制」を、具体的に現代の科学技術にかんする知識の発達とアメリカにおける科学者と技術者の増大の問題としてとらえ、それを年代、企業、給料、学歴などの点からとりあつかっている。ゴールドのヴェブレンの解釈については別の機会におこないたい。

(6) ヴェブレン「前掲書」訳137—139頁。

(7) ヴェブレン「前掲書」訳15頁。

(8) J. Dorfman, Thorstein Veblen and his America pp. 459—462

(9) H. Elser Jr., The Technocrats, Prophets of Automation p. 42 ff

四

テクノクラシーの思想の系譜は19世紀のサン・シモンに遡ることができる。そしてこの流れはコントにうけつがれている。アーミテッジがとらえるように広義のテクノクラシーの思想という大きい流れのなかでこの系譜をヴェブレンにのぼすことは容易であり、この作業はたしかに魅力的であろう。

しかしこのことからコントの産業社会についての認識が直接ヴェブレンの社会学的研究と結びつき、コントの実証主義的社会観がヴェブレンの理論に反映しているとみることはできない。そこには3つの点で混同がある。すなわち第1にコントとヴェブレンがテクノクラシー理論のカテゴリーに入るということを前提しており、この前提自体を検討してみることが必要である。そしてこの点についてはすでにのべたようにテクノクラシーの思想を狭義に理解するゆえに同一に論じえない。第2は両者を広義のテクノクラシーのカテゴリーに含めてもコントの社会学における産業家尊重の主張とヴェブレンの主張とは同じレベルでとりあつかわれるものでない。第3点として両者を広義のテクノクラシーのカテゴリーに含んだとしても、そのことは直ちにコントの社会学がヴェブレンの社会学と結びつくという理由にはならない。こ

のことからわたくしはヴェブレンのテクノクラシーの思想にコントの社会学における産業社会の理論が反映しているという主張に疑問をいだきコントの社会学とヴェブレンの社会学的研究をみていきたい。そこで、この点を両者の類似者と相違点において明らかにしたい。

コントの産業社会にかんする認識と産業技術の担い手についての分析は彼の師サン・シモンの遠長線上にあることはたしかである。サン・シモンは18世紀の哲学は革命的であったが、19世紀のそれは組織的であらねばならぬと考え、社会の目的を有用なものゝ生産に求めた。彼は社会を生産者と非生産者の2つの階級に分け、労働によって組織され、科学にみちびかれた産業的・科学的な社会の担い手こそ生産者であり、非生産者はこの産業社会の発展を妨げるものと考えた。そして科学者・技術者・産業家の3者を中心として組織された社会を構想したのである¹⁾。コントはサン・シモンの考えを受け継ぎ、初期の論文「社会再組織のために必要な科学的作業案」のなかで次のように展開した。彼は社会の活動を征服と生産の2つの作用に分け、征服しようとする軍事目的が古い組織の目的であるのにたいし、生産の目的は新しい組織の目的であるとみた。そしてこの新しい組織が抬頭しそれが支配的になる社会を産業的時期の社会とよんだ。それは生産を唯一の恒常的な活動の目的とする社会であり、「世俗的領域において産業が優勢になる」時期の社会である²⁾。この時期に精神的な基礎を支える能力をもつ科学者と生産の担い手である生産者が区別される。そしてその各々は政治にかんする理論的作業と実践的作業を分担するのである。

またコントは「実証精神叙説」において技術の概念を生産にかんするものから政治的・社会的な技術のそれへと拡大して用い、この技術をもって理論的予見と実践的方法とを結びつけようとした。そして彼はこれを健全な哲学と通俗的知性という2種の知性と、その所有者である人々の2つの階級にかんけいさせてとらえた。この2つの階級とは企業者(entrepreneurs)と作業者(opérateurs)である。そして実証的研究が後者に理解されるとき実際の仕事、実践的な活動と結びつき、作業者の仕事にたいする興味を高めるのに役立つと判

断した。このようにコントは実践的な普及を作業者に求め、これによって産業社会の実践的活動を高めようとしたのである³⁾。

コントの産業社会の担い手にかんする区分と、それについての理論はヴェブレンにおいてはさき

にのべたように企業と産業の区別となって展開されている。企業の金銭的利得と貨幣利潤の獲得にかんする目的と、産業における効率と効能への追求とは徹底的に対立するものである。彼にとって企業者と産業家の区別、企業者と技術者の区分、彼のいう「企業の将師」・「金融の将師」と「産業の将師」の区分が問題であって、前者を非生産者ととらえることにより生産者である産業家・技術者を対比させその連関を把握しようとした⁴⁾。たゞサン・シモン、コントにおいては産業社会という一般的レベルにおいての産業者の概念をとらえたのにたいし、ヴェブレンは企業と産業との対立を「制度」と「物質的環境」との対比において把握したのであり、しかもこの二分法による分析は、資本主義経済の特徴としての価格評価と金銭的販売術の優越と、生産者の支配をもたらす私有財産制度、企業資本と産業資本にかんする経済学的分析であり、またその背後に人間行動の動因としての本能論があった。

ところでコントの理論にも本能論が存在した。コントは人間行動の動因を情緒と性向と激情に求めた。彼は情緒と知性を区分する方法をしりぞけ知性よりむしろ衝動と本能を重視した。それは生理学的な本能論であった。これにくらべてヴェブレンの本能は後述するように目的論的、意識的な側面にとらえられており、心理学的な本能論といえることができる。ここに両者の相違点をみることができる。

つぎに両者を広くテクノクラシーの思想としてとらえたとしてもその思想における背景のちがいからくる相違点にふれておかねばならない。コントの実証哲学は人知の進化過程に応じて生ずる社会の3つの段階の時期をとらえ、最後の時期に、事実を原理とする科学的知識が開花し、自然的秩序にかわる社会的秩序を科学者と技術者によって計画せんとする19世紀の空想的社会主義の色彩をもっていた。これにたいしヴェブレンは第1次大戦時代にみられた科学技術の発達を機械過程とし

てとらえた。それはたんに機械的設備を利用する生産過程を意味するだけでなく、生産過程の管理、科学技術的な合理化、機械化を意味する。そして彼はこの機械過程が諸階級にたいしてもたらす効果と結果を検討することに焦点をおいている。この結果は近代生活に機械的感觉を与え、行為と知識の標準化をもたらし、因果性にもとづく科学的合理的な態度と精神をうみ出した。そしてこの機械過程の訓練を直接うける階級は一般労働者だけでなく、とくに技術者である。彼はこの機械過程が労働者と科学者・技術者をふくめた産業階級にますます思考の事実的習慣(matter of fact habit of thought)を与えるのにたいし、企業者は本来産業過程に直接的な関係をもたないために機械過程からの影響をうけず機械時代以前の思考習慣によって支配され、固定化した企業制度の枠にとどまっております；したがって科学、技術の急速な発達によって2つの階級の乖離は次第に大きくなり、相互理解がますます困難の度を加えると判断した⁵⁾。

この判断は別の角度からみれば技術自体と技術の資本主義的な利用との区別から導くことができる。技術自体の目的は資本主義的でもなければ社会主義的でもないヴェブレンは考える。彼にとって技術が人間を機械化し、物化するのとは技術自体の問題ではなく技術を利用する社会制度から生ずるのである。それは彼のいう価格制度、私有財産制度の欠陥から生ずる。産業と企業の矛盾と対立は、機械過程と価格制度の対立と矛盾、相刻となってあらわれる。この対立を克服し、相刻を相生に転じる可能性を彼は技術者による支配に求め、それによって社会秩序を回復し、新しい社会を建設しようとしたのである。ここにコントの空想的社会主義にもとづくテクノクラシーの理論とヴェブレンの経済学的な資本主義制度の批判としてのテクノクラシーの思想とのちがいを見出すことができるのである。

註(1) 坂本慶一「フランス産業革命思想の形成」第5章第3節参照。

(2) コント「社会再組織の科学的基礎」飛沢謙一訳 108頁。

(3) コント「実証精神叙説」平山高次訳 125頁。

(4) T. Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, p. 20, p. 307

(5) T. Veblen, *ibid.*, pp. 66—67 pp. 312—313

五

ヴェブレンのテクノクラシーの思想とコントの産業社会の把握とがどのように類似した側面を持ち、どの点で相違しているかが判明した。ところで、社会学理論とヴェブレンとの直接の結びつきという点ではコントの社会学よりむしろスペンサーの社会学が緊密である。

とくにスペンサーの理論は一方ではダーウィンの進化論にもとづく社会進化論としてヴェブレンにうけつがれ、他方では当時「アメリカ版のスペンサー主義者」といわれたサムナーを通してヴェブレンに影響している。

ドーガートは「スペンサーの社会学原理における社会制度の進化にかんする分析は、ヴェブレンに、とくに同じ方法で経済制度をとりあつかうことができることを暗示したもの」とのべているが¹⁾、この制度論の問題にふれるまえに、進化論の問題からみていきたい。

ヴェブレンは進化論をもって科学と経済学を前近代的なものと近代的なものに区別する指標として用いた。彼は「有階級論」を公刊する前年、1898年に「経済学はなぜ進化論的科学でないか」という論文をかき、そのなかで当時の経済学の陳腐化を指摘するとともに、社会諸科学にもこの傾向がみれるとし、次のようにいっている。「進化論的科学と前進化論的科学のちがいは事実の強調にあるのではない」、「それは科学者の2つの対蹠的な世代における精神態度と観点のちがいにある。いゝかえればそれは科学的目的のために事実を評価する基礎に存在するちがいであり、事実を認識する関心の相違である」²⁾。ヴェブレンのいう進化論的科学とは、たんに現実的であり、事実をとりあつかう科学と過程にかんする理論であるだけでなく、事実を取扱うさいの精神態度にこそあらわれるものである。前進化論的科学の基準は自然法則にあり、古典的な科学の目的は絶対的真理を基準にして知識を方式化することにあった³⁾。これに反して進化論的科学は客観的事実と過程に注目し、そこに見出される累積的な因果関係(cumulative causation)を追求する。累積的な因果関係の追求は事実の発展過程に注目し、因果関係の不安定で継続的な変化にかゝわるものである⁴⁾。ヴ

ェブレンは進化論的科学の基準からみて古典経済学をアニミズム的であり、目的論的な理論であり、その中心は快樂主義的な計算にあったとし、それを一定の経済的均衡状態を取扱う一種の分類学にすぎないと評した。さらにマルクス主義についてもダーヴィニズムの因果論の立場からそれを目的論的であると批判し、マルクス主義が功利主義的起源をもち、倫理的価値判断を含む点でヘーゲル主義の残滓を残すものとみた⁵⁾。

さて、ヴェブレンの進化論はこのようにダーヴィン・スペンサーの進化論の影響を受けて展開されたのであるが、スペンサー理論はサムナーを通じてヴェブレンにうつがれた。

サムナーはスペンサーの社会淘汰による進化論を継承して、生存競争を人間の自然にたいする闘いと人間間の闘争の2つに分けた。前者においては多数の人間が相互に協力して自然を征服する協力関係が、後者にあっては人間同志が相互に反目し敵対する競争関係がみられる。それはグンプロヴィッチやラッツェンホーファーなどの主張に近い。しかし人間間の闘争・対立関係は内集団 (in-group) におけるより外集団 (out-group) との関係にみられる。彼は原始未開社会の関係を内集団における忠誠と、内集団と外集団との敵対としてとらえている⁶⁾。また彼は人間が一定の生活的欲求をもち、一定の環境においてこれを充足しようとするとき、生存競争にもっとも有利な一定の行為の習慣をみづからつくりあげるものとみて、これをフォーク・ウェイズ (民習) とよんだ。彼によれば民習とは目的にたいする手段のよりよき適応へと改良せんとする努力であり、相互に調和をたもたんとする努力である。それは人々の欲求に適応するために人々の間で無意識に支持される標準的な行動様式である。サムナーは習慣とか社会的遺産、伝統などとよばれる言葉のなかに共通にみられる行動様式の統一性と反復性、および広汎な並行性と並存性に注目し、民習という用語をつくったのである。

そしてこれが長い時間と経験とをとおして人々によって重要と認められ、その価値が支持されると伝統になる。またこれらの行動様式から逸脱する行動の規制が積極的には是認されたものはモレス (原規) とよばれる。これらの民習と原規は不変

のものでは決してない。それは生存競争における人間の欲求充足への試行錯誤によって淘汰されるものであり、生活条件の変化によって変化する。このようにサムナーが民習と原規を動的にとらえ進化するものとみたのと同様にヴェブレンも制度概念をたえず変化するものとして動的に把握した。それはある一つの制度として成立つ現実の思考習慣が過去の状況に適応したものであり、新しい状況の変化に適応するためには必然的に新しい制度が作られねばならないという進化の過程のなかでとらえられるものである。

しかし進化論的な動的把握はサムナーとヴェブレンにおいて同じであってもその立場はことなっている。それはサムナーにおける功利主義的個人主義とヴェブレンの反個人主義の立場である。このことはスペンサーとヴェブレンにおいてもいえる。つまりスペンサーとサムナーの流れが個人主義の立場に立っていたからである。この理由は一般的にヴェブレンの生きた時代のアメリカ資本主義の経済がサムナーの時代のそれより急速に発達していったという歴史的・社会的背景を反映しているといえるが、独立宣言以降、市民社会を形成するというアメリカの夢が現実において破られ、主観的個人主義やローマン主義、ユートピア的改良主義が破綻した時代の暗い影をうつしているといえよう。このことと関係させて附言するとサムナーの進化論にオプティミズムをみることができるといえば、ヴェブレンのそれにはペシミズムをうかがうことができるといえよう。

さて、本題に戻ると、サムナーは制度概念を民習と原規の複合体とみ、社会集団を風習の機能的観点から分析した。サムナーは制度を民習と原規からつくられたものととらえ、制度は観念と構造から成立つものと考えた。たとえば社会の基本的な制度としての所有、結婚、宗教は民習に始まるものであり、それが習慣となる。それがいかに未開で原始的なものであっても、そこに人々にたいする福祉にかんする哲学が添加すると原規に展開していくと考えた。そしてこれらが規則にかんしてより明確で特殊なものとなり、構造をつくり制度を完全にするとみた。制定された制度は合理的な発明と意図の産物であるといえるのである⁷⁾。

さて、慣習と制度とは時として区別され時とし

て混同される。両者の共通点はともに行動様式であり、人間行動における社会関係の体系化であるという点、さらにこれが外在化して社会集団の成員の行動を規制すること、つまり社会統制の手段、集団の連帯性を保つ手段という点に求められる。だがそれはたゞちに行動そのものではないし体系化された行動でもない。いわばそれは行動の外部にある。しかし行動の外枠は慣習と制度の形式的側面であって内容は行動にあるといえよう。慣習と制度の背景にありこれを支えるものは人間の社会関係であるが、これを積極的、明示的に人々の承認に支えられたものと、消極的なものに分けることができる。制度とは前者をさし、慣習は後者に属している。

では制度と民習、原規とはどのようにことなっているのだろうか。サムナーはこれを次のように区別する。制度は合理的で実証的な特徴をもち、より機械的で功利的であり、制度のもとでの行動は意識的で自発的である。これにたいして民習のもとでの行動は無意識的であり非自発的である。また原規は感情と信念の要素をもっている。いゝかえれば制度は積極的な特徴をもつが、原規は明確に組織されず、規定されない⁸⁹⁾。

いわゆる制度学派の創始者として知られているヴェブレンにとって制度概念は彼の経済学のみならず社会学的研究においてもきわめて重要な概念であったといえよう。もちろんこの概念は2つの対抗する勢力の対立と抗争から導き出されたものであり、その方法はヘーゲルの弁証法の適用であるといえよう。しかし、この点についてはいまふれないで、むしろ彼のいう制度概念とは何かという問題に入っていきたい。

周知のように彼の「有閑階級論」の副題は「諸制度の進化にかんする経済の研究」であったが、ここで彼は近代生活の一つの経済的要因として、生産的集団に対立する非生産的な有閑階級の発生と成長、さらに慣習と生活様式をとらえ、その機能と役割を論じるために私有財産制度の起源を分析した。彼は有閑階級の出現が所有制度のはじまりと時期を同じくしており、この2つの制度が同じ経済的諸力の組み合わせから生じ、初期の段階において同じ社会構造から発生するとみた。⁹⁰⁾ そしてこの考え方の基底にはのちに「制作者本能論」

で展開される制作者本能と金銭的見栄にかんする本能論があり、さらに「不在所有者論」では、この本能論にもとづく区分により近代資本主義体制を近代的な機械制産業と前近代的な営利企業からなり立つものととらえている。一方彼は制度を「過去のプロセスによって形成される思考習慣(habits of thought)の全体的有機的な複合」であると説明する。この説明は制度の時間的な側面を重視し、慣習の相互連関性に注目したものである¹⁰⁾。また彼は制度概念を人間の物質的生活手段にたいする利害関係によって形成された側面に重点をおいて分析しているが、さらにそれを一步進めていままでの経済学が看過してきた生活習慣の累積的発展の問題に注目した。ここに彼の社会学的、社会心理学的研究をよみとることができるのである。彼は私有財産制度を金銭的見栄による富の所有の制度とみて、そこで社会的名声と高い社会的地位を獲得する手段としての金銭的利潤が追求され、その結果として生産労働からの解放と閑暇の享受、生産労働の蔑視、目立つ消費、いわゆる衒学的消費(conspicuous consumption)が生活の表徴となることを指摘した。

また彼は制度を「本質的には、個人および社会の特定の諸関係および特定の機能にかんする普遍的な思考習慣」と規定した。この規定は制度の社会性を重視したものであるといえよう¹¹⁾。この思考習慣は環境が変化を強要しなければ永続する傾向をもつ。つまりそれ自体が保守的傾向を有している。社会の進化は過去の事情に即して形成された思考習慣が新しい事情によって適応しなくなったとき変らざるをえない。それが思考習慣の淘汰的適応過程である。つまりここに慣習と思考習慣の累積的発達と習俗と生活様式の淘汰的適応が生ずる。しかし有閑階級はこのような発達を阻止する働きをおこなっている。それは一口でいえば保守的態度の強化であって、有閑階級の制度は(一) 階級自体に固有の不活潑性と(二) 顕著な浪費と保守主義にかんするこの階級の慣例的模範、(三) 富と生活手段の不平等な分配制度によって社会の進歩と進化、文化の発展をさまたげるという特徴を有している。この階級の特徴は『「存在するものはすべてよい」という格言に要約される』とヴェブレンはのべている¹²⁾。

ヴェブレンは制度概念を経済制度、とくにそのなかで金銭的制度としての有閑階級制度、不在所有者制度、私有財産制度に注目しておこなったのであるが、それは生産の制度との対比において論じられる。つまり差別的経済利益に仕える制度と非差別的経済利益に仕える制度の連関性の分析である。有閑階級が後者にたいする関係は金銭的關係であり、搾取の關係である。それは生産關係や有用性の關係ではない。しかし「自然の力を支配する人間の知識と技術が発達するにしたがって、社会集団の成員相互間の習慣的方法や、全体としての集団の生活過程をすゝめる習慣的方法は、もはや以前と同じ結果をうまなく」なる¹³⁾。彼は利潤を追求する企業が、機械産業の出現以前の環境に適應するものとして形成された制度に立脚しているとみる。したがって現在の科学技術の発達にみられる新しい環境に旧い環境に即応してつくられた思考習慣が適合せず、そこに乖離が生じ対立が発生するとみたのである¹⁴⁾。

さて、ドーガートは『ヴェブレンの累積的因果關係あるいは時としてよばれるような累積的進化論的制度主義はスペンサーの「継続的・蓄積的变化の理論」である。』という、「スペンサーが習慣・慣習・伝統の力を認めたことはヴェブレンがこれらを文化の進化を条件づけ決定する積極的なファクターと過程として強調したことに反映している」とのべているが、このことが妥当か否かは本能論と習慣論にかんする検討によって明らかにされるであろう¹⁵⁾。

註(1) S. M. Daugert, *The Philosophy of Thorstein Veblen* pp. 46—47

サムナーとヴェブレンの社会進化論については富永健一「産業主義と人間社会」(『今日の社会心理学』I) 113—127頁を参照。

(2) T. Veblen, *Why is Economics not an Evolutionary Science?* (*The Place of Science in Modern Civilization and other Essays*) pp. 59—60

(3) T. Veblen, *ibid.*, p. 61

(4) T. Veblen, *ibid.*, p. 61—62

この累積的因果關係の概念を中心としてドーフマンはダーヴィンの動的進化論的・自然主義的見解とアニミスティックな前ダーヴィンの見解を区別しヴェブレンの立場をえがいている。(T. Dorfman, *Veblen and his America* p. 155)

(5) T. Veblen, *The Economics of Karl Marx: I* (*The Place of Science in Modern Civilization and other Essays*) pp. 415—417

(6) J. Dorfman, *ibid.*, pp. 53—45

(7) G. Sumner, *Folkways* p. 12

(8) G. Sumner, *ibid.*, pp. 53—54

(9) ヴェブレン「有閑階級論」陸井三郎訳 17頁。

(10) T. Veblen, *Why is Economics an Evolutionary Science?* p. 77

(11) ヴェブレン「前掲書」訳116頁。

(12) ヴェブレン「前掲書」訳125頁。

(13) ヴェブレン「前掲書」訳118頁。

(14) ここではテクノクラシーの思想を中心として企業と産業に焦点をおき、後者を機械過程としてとらえたが、ハリスが指摘するように制度としてはこのほかに現代国家とキリスト教倫理という制度をさらに2つつけ加えることもできよう。(A. L. Harris, *Veblen and the Social Phenomenon of Capitalism*, *American Economic Review*, Vol. 41 No. 2) p. 67

(15) S. M. Daugert, *The Philosophy of Thorstein Veblen* p. 47

六

ヴェブレンにとって経済学の課題は経済変化を説明することにあつた。彼はそれを進化論的方法を用いておこなった。とくに彼にとって経済制度の分析がきわめて重要な意味をもっていたことは以上の説明で一応明らかになったであろう。

彼はマルクスとちがって、人間の行動と文化を思考習慣の産物であるとみた。彼は「物質的必要が人間の行動と文化の発達を制約するか否か、またどれほど規制しうるかという問題はこれらの物質的必要が人間の思考習慣を形成するとき有する役割の問題」であり「人間の文化のこれらの特性とそれからつくられた制度的構造が物質的(経済的)必要の結果であるか否か、またどこまでそうなのかという問題は習慣の形成をもたらす環境の複合のなかで経済的必要がもつ効力の種類と程度の問題である」という¹⁾。

彼は人間が習慣によって生き、伝統にしたがって生活し、既存の制度にもとづいて生活する点に注目した。彼は「人間生活の習慣的要素はたえず累積的に変化し、制度の不断の多産的な成長を起こす」と解し、そして「制度構造の変化はたえず変化する文化的条件のもとで生活の変化する規律に応じておこるが、とくに人間性はかわらない」。

とみるヴェブレンの主題の一つはことになった制度がちがった社会習慣から生ずること、その習慣と制度の連関性を解明することであり、古い習慣と制度がこれらに適應することを阻害する点を考察することにあつた。あとの点にかんしてはすでにみたように有閑階級の保守主義がこの典型的なものであつた。

ではこのような習慣と制度はどのようにして形成されるのであろうか。この問いにたいする解答は彼の本能論に用意されている。C. E. アイレスはヴェブレンのもっとも重要な理論の一つを本能論に求めている。そこでヴェブレンの本能論の形成と社会学との連関、より正確には社会心理学との関係をみたい。ワトキンズが指摘するようにヴェブレンに影響を与えた社会心理学はジェイムス、J. デューイ、J. レーブなどであるが、ここではマクドーガルの社会心理学をとりあげてみよう⁴⁾。それは彼の本能論がスペンサーの遠長線上に位置するものであるからであり、彼の心理学が本能論を基礎として展開されており、ヴェブレンはこの本能論を批判的に摂取して彼独自の本能論を産出しているからである。

さて、スペンサーの心理学において自発性をもつ個人と、個人をとりまく環境との関係が、順応と対応においてとらえられ、個人の主体性にその力点がおかれた。この個人主体説はマクドーガルに受け継がれた。マクドーガルは社会生活にとって重要なものを個人の心的特性に求め、社会の問題を個人のなかに解消せしめようとする。そして心理学を人間の行為の源泉である衝動と動機を研究する学問とし、人間を理性的で合理的な存在とみるよりも衝動と本能に動かされる存在とみた⁴⁾。ここに彼の反理性主義的、反主知主義的な心理学の特徴がある。そして彼は人間の本能と動物のそれとを区別するため人間行動にかんする本能を性向 (propensity) とよびかえ、生得的な性向を18数えあげている⁵⁾。いまこの18の性向について吟味する余裕はないが彼は生得的な性向が精神活動の土台であり、行動の原動力であるとみて、それが生得的な能力と結びついていると考えた。人間においてはこの性向と能力との結合が固定的でなく、流動的であり、変化にとんでいゝ。ここに人間の可塑性があり、生物学的遺伝でなく社会

化の特性がみられるのである。マクドーガルは性向がそれに相当するエモーションをともない、このエモーションをとまなう傾向性がいくつか組織されたものをセンチメントとよんでいる⁶⁾。そしてこのセンチメントに行動の認知動因および情動の3つを含ませることにより生物的本能論の機械性を克服しようとしたのである。

ヴェブレンの本能論はこのマクドーガルの本能論の流れにみることができる。ヴェブレンは功利主義的な人間性と主知主義的なそれへの反撥から彼の本能論を展開した。彼は人間行動の心理的側面を取扱う科学にとって広義の本能という術語が不正確であるとみ、生理学的な本能規定についてもその限界を指摘した。彼は本能を解剖学的・生理学的な資質 (aptitude) のように機械論的な用語として規定せず、またそれが生理学的にみれる向性的な感性や趨性的な感性、あるいは単一細胞や臓器の刺激などに還元できないものであって、それはいくつかの本能的な資質の共存を意味するものと考えた⁷⁾。さらに彼は本能を心理的な面で単一の要素でもないとし、本能をいくつかの資質の共存においてとらえた⁸⁾。そして彼は人間性をたんに外界の刺激に反応するような消極的な性質のものでなく、あくまで知的で目的論的な行動をいとなむ積極的な性質のものとみた¹⁰⁾。ヴェブレンは別の論文で人間は単に環境の諸力の通路におかれることによりみだされるような欲望の束 (a bundle of desires) ではなく、たえず拡がる活動のなかで実現と表現を求める性向と習慣との緊密な構造であるとみた。この見解によれば、「人間の活動、とりわけ経済行動は所与の欲望を充足させる過程の、主要でない何かとは考えられない。その活動自体が過程の実質的な事実である」とのべ人間活動の能動性を指摘した¹¹⁾。ここにヴェブレンの本能概念が目的論的、意識的にとらえられている特徴が見られよう。

ところで、ヴェブレンの本能の概念はワトキンズによれば大きく2つのカテゴリーに分けることができるという。その一つは集団にかんする利他的性癖であり、他は自己にかんする利己的略奪的な性癖である。この区分について小原氏は前者を「社会的に有用な財貨の製作や創造の原動力となる性向」とよび、後者を「創造するものではなく

て所有するものであり、社会的に有用なものではなくて、むしろ無用なもの」と説明している¹²⁾。

前者のカテゴリーには親性本能、制作本能および好奇本能の3つの本能があり、後者には見栄をはる消費、武勇、支配あるいはけんか好き、威信あるいは自己誇張などの性癖が含まれる¹³⁾。

前者のカテゴリーに入る3つの本能のなかでヴェブレンは次のようにのべて制作者本能を主要なものとした。「種族の物質的福祉にたいし、それゆえに生物学的成功にたいして直接に役立つこれらの本能的素質のなかで主要なものは多分制作の感覚としてここで のべている 本能的性向 であろう。」¹⁴⁾これだけでは彼が制作者本能を他の本能より主要なものとした積極的な理由の十分な説明はないけれども、彼は自然の脅威にさらされた人類にとって自然の力を利用し、さらに自然が与えた条件だけで満足せず、自然環境を克服し物質的生産を促進する本能に重点をおいたと考えられる。彼は制作者本能を「効果的な仕事にたいする偏好と、無駄な努力にたいする嫌忌」あるいは実際的な方便、手段と方法、効率と経済の考案、熟練、創造的な仕事、事実の技術的支配にたいする関心」と規定している¹⁵⁾。この規定には多くの内容がもりこまれており、しかもそこにもられた多くの性向は相互に密接に結びつき重複している。効率と能率にたいする性向、それにもとづく手段と方法の選択は一口でいえば合理性の追求といえよう。しかし合理性の追求が主知主義的・理性的におこなわれるとそれは彼のいう好奇本能のカテゴリーに含まれる。彼は制作者本能を中心におくためかえて科学的思考の側面を看過し、せっかく好奇本能を分類しながら制作者本能のなかに科学的・理性的側面をもちこんで混乱をおこしているといえよう。このことは彼が制作者本能論の最終章で機械産業に言及し、新しい時代の技術を科学との密接な結合においてとらえながらも十分に近代技術を把握せず、科学的思考が新しい時代にもつ多くの問題にふれていないことにもあらわれる。

ところで、ヴェブレンは人類社会の発展過程を制作者本能と金銭的見栄との対立と交代のプロセスとしてとらえた。それは次のような歴史的発展として考えられている。一つは原始未開の状態の社会であり、他はそれにつづく略奪的社会である。

略奪的社会は野蛮時代と金銭的時期に二分され、さらにこの金銭的時期は手工業時代と機械時代に細分できる¹⁶⁾。

最初の原始未開の状態は狩猟、採集経済にはじまり農耕がそれにつづく。そこでは親性本能と制作本能がともに優勢であり、そこには性別にもとづく生産活動の分業があるだけで支配と服従の社会関係はなかった。また職業の相違も主として四季の変化に特徴づけられるものであり、技術的知識と熟達も広範囲ではなく目だたなかった¹⁷⁾。エスキモーやポリネシアなど現存する未開種族にそれが残っている。彼はそこでは母性が人間の事物の秩序づけの中心であり、婦人が産業的な地域社会で指導的役割をになっていたとみる¹⁸⁾。このように原始未開状態についての彼のイメージはユートピア的であり、2つの本能が調和している状態としてえがかれている。この未開社会は利己的本能が優勢になると私有財産制度と有閑階級が発生し、略奪的な野蛮時代へと変わっていく。「有閑階級論」においては原始的な社会集団の活動力を「活動的でないもの」と「活動的なもの」、「功名」(exploit)と「勤労」(industry)との2つに分け、前者を男性に後者を女性に帰属するものとし、この性別の職業間の区別が有閑階級発生に起因するととらえた¹⁹⁾。その状態が変化するにつれ母系制社会は家父長的社会となり、制作者本能にもとづく生産労働の蔑視と顕著な消費が生ずる。略奪的社会の野蛮時代と金銭的時代がこれである。しかし手工業時代に入ると「所有者と労働者の古い関係が次第に新しい技術の枠組のなかで再び確立される」ようになる。「制作者本能が再び日常生活の規律を組成している要素のなかで有力な地位につくようになり、人間の思考習慣に特徴的な性癖を与えるようになる」²⁰⁾。そして彼はこの傾向を「文化の商業化の進行と大体において平行しており一般的にいうと宗教的畏怖の衰退と関係している」。とのべている²¹⁾。

ついで機械時代は手工業的な筋肉労働にもとづく技術をこえ、職人が用いる道具の範囲をこえて機械が登場するときである。彼はこの時代を技術が科学と密接に結合した時期という。手仕事の時代の技術は科学と関係をもたなかったが、新しい時代の技術は事実在即した方法でものごとをとり

あつかうようになる。この技術の論理は主観的でパーソナルな判断を許さないような機械過程の論理にはかならない。機械過程はあらゆるものを計算し測定し、そこに何らの神秘性をも含まない²²⁾。そしてこの機械時代は今日大規模の産業の時代、資本主義、自由競争、信用経済の時代を支えているのである。ヴェブレンはこの時代に制作技術と販売術との分離と対立があらわれ、後者の前者にたいする優越が生じ、技術的効率がすべて金銭的利潤によってのみ評価され、「汚染」され、いくつかの点でかつての略奪的社会に戻る様相を呈するとみた。技術者と企業者の分離、企業における技術的過程を担当する経営者と金融をつかさどる企業者の分化が生ずる。そして後者による前者の支配が経済体制の現代の特徴である²³⁾。そして技術的効率をこのような利潤の支配から開放することがこのテクノクラシーの思想であった。

註(1) T. Veblen, *The Socialist Economics of Marx and his Followers (The Place of Science in Modern Civilization and other Essays)* p. 438

(2) T. Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* p. 18

(3) C. E. Ayres, *Veblen's Theory Instincts Reconsidered* p. 25, M. W. Watkins, *Veblen's View of Cultural Evolution* p. 7—9 p. 17 (Ed. by. D. F. Doud, *Thorstein Veblen: A Critical Reappraisal*)

(4) W. Mac Dougall, *An Introduction to Social Psychology* p. 17 p. 7—9

(5) W. MacDougall, *ibid.*, pp. 97—98

(6) W. MacDougall, *ibid.*, p. 221

(7) T. Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* p. 2 p. 8 p. 11

(8) T. Veblen, *ibid.*, pp. 27—28

(9) T. Veblen, *ibid.*, p. 27

(10) T. Veblen, *ibid.*, pp. 31—32

(11) T. Veblen, *Why is Economics not an Evolutionary Science? (The Place of Science in Modern Civilization and other Essays)* p. 74

(12) M. W. Watkiss, *Veblen's View of Cultural Evolution* (Ed. by D. F. Doud, *Thorstein Veblen: A Critical Reappraisal*) p. 253, p. 255

小原敬士「ヴェブレンの社会経済思想」81—82頁。

(13) M. W. Watkins, *ibid.*, pp. 253—254

(14) T. Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, p. 25

(15) T. Veblen, *ibid.*, p. 187, p. 33

(16) A. K. Davis, *Veblen (International Encyclopedia of the Social Sciences vol. 16)* p. 305

(17) T. Veblen, *ibid.*, p. 141

(18) T. Veblen, *ibid.*, pp. 94—95

(19) ヴェブレン「有閑階級論」訳 10—11頁。

(20) T. Veblen, *ibid.*, p. 234

(21) T. Veblen, *ibid.*, p. 181

(22) T. Veblen, *ibid.*, p. 306

(23) T. Veblen, *ibid.*, p. 345

七

わたくしは以上においてヴェブレンの理論が社会学とどのように結びついているかという点を中心にみてきた。それを学説史の立場からとくにテクノクラシーの思想という側面から取扱った。それを要約すると次の3点になる。

第1はテクノクラシーの思想を技術者による社会改造の思想といえ、ヴェブレンの思想が初期の社会学における産業社会および産業家にかんする認識とどの点で類似しあるいは相違するかをみたこと、第2はヴェブレンのテクノクラシーの思想は本能論と習慣論、制度論という理論的支柱によって構築されたものであり、これらの理論と当時の社会学理論との連関に注目することにより、テクノクラシーの思想の社会学研究を理解しようとしたこと。第3は彼のテクノクラシーの思想が産業社会における技術的要因を重視したものであり、近代資本主義体制において物質的生産と金銭的利潤の2つを区別し、それにもとづく産業と企業の機能の分化をみることに、そこに作用する制度の社会的意味と彼独自のエリート論をよみとろうとした。

ところで彼の理論については多くの欠陥と不明確さがある。たとえば彼の本能論は本能の目的、意識的な側面を強調すると同時に、それを生物学的な遺伝とみる点を残しており、本能の生物学的な性質と習慣と制度の社会性との関係が明確になっていない。

つぎに制作者本能から生じる生産力説的偏向、つまり生産力の理解が生産関係から機械的に切りはなされてしまっており、さらに彼のおこなう古典経済学、歴史学派、マルクス主義にたいする批判についての欠陥などがある。

社会学的観点にたつて彼の本能論、習慣論、制度論の問題点を列挙すれば、まず第1に制作者本能を重視する根拠が明確でないことがあげられる。第2に他の本能との連関性があいまいであることである。とくに近代産業の機械過程を理解する場合、好奇本能にもとづく科学の発達と、それと技術との結びつきを理解することが必要である。第3点は産業技術の発達を阻止する要因は企業の制度だけに求められるものでなく、科学・技術自体のもつ制度的命令、たとえばマートンのような系統的懷疑主義、普遍主義、公有性、利害の超越といった点をはじめとして¹⁾多くの社会制度との連関のもとで全体的な考察をしなければならない。第4点としてあげるべきことは彼が本能論から出発して習慣・制度への方向を重視し、その逆の方向、つまり彼が有閑階級論で少しふれたところの、制度が社会構造のみならず社会成員の個人的性格にも影響を与えるという方向についての分析を深めていないことである。第5点は技術者集団にかんする社会学的分析の不足である。彼は「産業の将師」と科学者、専門技術者と一般労働者、生産技術者と経営技術のエキスパート、さらにインテリゲンチアとテクノクラートの区分とそれらの関係については十分論及していない。

しかしこれらの諸点にもかかわらず彼の独自の問題提起と接近方法は彼の社会学的研究を示すものであって、技術にかんする社会学的研究に不可欠な基本的な問題点について多くの示唆を与えるものといえよう。それは技術の問題を行動理論から出発させ、そこにみることができる生産上の効率化と合理化の側面を重視し、生産者職業と非生産者職業との関係を習慣と制度の問題から取扱い、さらに現代を機械制産業の時代であるとともに営利企業の時代として論じ、そこに近代社会のもつ矛盾と産業化の担い手の問題として注目した点にある。

そしてこれらの諸点をつらぬく彼のアプローチは二元論的な問題の立てかたと進化論であった。企業と産業、金銭的利潤と技術的効率、企業資本と産業資本の二元論が「有閑階級論」をはじめとして「不在所有者論」あるいはその他多くの論文に一貫してみられる基本軸であるといつてよいであろう。そしてこれらの理論にみられる二元論の

原点は彼の人間行動のとらえ方、本能論、人間観に求められる。

いま彼の二元論を次の2つのちがったレベルの基本軸で切ってみると、一方は利己的・利他的な軸、他方は合理性・非合理性の軸における二元論としてとらえることができる。

制作者本能、好奇本能、親性本能はいづれも利他的であり集団本位的であるのにたいし金銭的見栄をはじめとする本能は利己的である。また人間行動は目的合理的、知的、理性的であるとともに習慣と伝統に生き、制度にしたがう非合理性を有している。彼は利他的で目的合理的な制作者本能にもとづく産業技術の変化が物質的環境をつくるのにたいし、他方では個人と社会の特定の関係と機能にかんする支配的な思考習慣の残存と固定化を許すという非合理的な側面に注目した。それは産業技術が生み出した物質環境と思考習慣、制度との対立、背反となってあらわれる。彼は合理的な制作者本能が進歩的であり、過去の習慣と制度にとらわれずに変化する側面だけに注目した。そしてこの対極として企業のもつ伝統的・保守的特徴の側面に注目したのである。その制度は現代の機械過程に適合するものではない。彼の理論は本能論から出発して習慣と制度のもつ伝統性、保守性を分析し、技術者の集団ないし組織をこの制度論の遠長線上にとらえようとしたものである。

いゝかえれば本能論、習慣論、制度論が彼の理論の大きい流れであるといえ、その流れを技術の側面から切ると、そこにテクノクラシーの思想があらわれるといふことができよう。そしてこの分析を彼は進化論的方法によっておこなった。彼は目的論的考察を前進化論的なものとして排除し、現実の複雑な現象の相互の連関性、彼のいう累積的因果関係を把握しようとした。そしてここに用いる進化論的方法を彼は行動理論、社会心理学的本能論、社会学的制度論によって武装したのである。彼の経済学はこの点で行動理論であり人間学、社会学であった。彼は「物質的事実における諸変化がたゞ人間的要因をとおして、より一そうの変化を生む発展の連続性は人間的素材の中に求めうるべきである」とのべている²⁾。そしてこの人間と人間行動にかんする進化理論と本能論は思考習慣と制度にかんする理論によって人間行動と制度

的環境の作用と反作用にかんする問題へと展開していったのである。そこに彼の社会学への接近、技術の社会学との接点をみることができよう。

註(1) マートン「社会理論と社会構造」森東吾 他訳 第13章。

(2) T. Veblen, Why is Economic not an Evolu-

tionary Science (The Place of Science in Modern Civilization and other Essays) pp. 70—72

付記 この稿をかくにあたって、ヴェブレンの文献を貸して下さり、またテクノクラシーの思想と彼の経済理論についていろいろ有益な示唆を与えて下さった小谷正守氏にお礼を申し上げたい。